

自助グループ参加によって変化した遺族の心理

国立病院機構四国がんセンター

○大塚 由紀子

国立病院機構姫路医療センター

柴田 寛子

高知県立総合看護専門学校

竹内 恵

高知大学医学部附属病院

森木 妙子（1階東病棟）

キーワード：遺族ケア 自助グループ 心理

【目 的】

がんで家族を亡くした遺族の心理が自助グループへの参加により、どのように変化したかを明らかにし、遺族ケアへの示唆を得る。

【方 法】

自助グループに参加する遺族の方4名に面接を行う。データ分析は、逐語録をもとにコード化カテゴリ化を進め、内容分析を行った。

【倫理的配慮】

得られたデータの取り扱い、研究以外の目的で使用せず個人情報と保護した。自助グループの会の代表者と参加者に研究協力に対し文書で同意を得た。

【結 果】

分析の結果、遺族の心理について18のカテゴリが導出された。その中で自助グループへの参加により変化した遺族の心理は、《仲間のふれあいに存在価値を認め、更なる期待を持つ》要素が導出された。具体的には〈共感できる仲間を求める〉〈辛い思いをしているのは自分だけではないということが励みになる〉〈死別体験を聞いて気持ちが楽になり癒しになる〉〈他の遺族の力になりたい〉〈人のこころの動きへの関心〉〈救われる場所の提供〉の6つから構成されていた。

【結 論】

遺族にとって安心して悲しみを表出できる居場所がどのくらい重要であるのか、その価値が明らかになった。つまり自助グループへの参加によって、共感できる仲間を得たことや、死別の悲しみから立ち直った人との接触から元気もらい一人ではないという心理の変化から、自助グループの会が個々の遺族の悲嘆作業を温かく見守り支えている事がわかった。

〔平成20年7月4・5日 第13回日本緩和医療学会（静岡）にて発表〕